

人間の運命ほど判らないものはない。私がいた部隊は関東軍にかわり、北支から満州に移動した。私は生来丈夫な体でなかつたので、済南の秀嶺部隊に転属になった。私が丈夫な体であつたなら、戦友と共に関東軍へ移動、終戦と共にシベリアへ送られ、おそらく私はこの世にいなかったらう。

大陸生活二十三年

埼玉県 小田 武夫

大正十二年、満鉄本社経理部に入社した。大陸に強い憧れをもっていたので嬉しかった。

大連は整然とした佇い。目抜き通りには三越、幾久屋デパート等が建ちならび、住宅地は赤い屋根、青い屋根、ガス・電気・水道は完備し、舗装道路わきにはアカシアの並木が連なり、無税港のためか物資は豊富、実に住み心地の良い街だった。

中国を理解するには、まず言葉からといちおうの努

力をした。

大連から旅順まで（四十キロ）のハイキングや戦跡巡り、一か月の夏タイム（午前中だけ勤務）には旅順線で大連から一時間の夏家河子海水浴場に友人とのテント生活等、青春を謳歌した。

昭和六年、満州事変勃発以後、世相は徐々に緊迫し遂に全面戦争に突入、軍は破竹の勢いで河北、山西両省を席捲。国民政府軍を黄河以西に敗退させたが、中国国民衆との融和、治安維持のために中国語を解す人が必要との軍の要請に、十三年一月から十二月まで、宣撫班長として河北省石門地区、山西省河津地区で軍行動を共にした。蒋介石は日本軍の占領は点と線のみと言ったが、事実占領した県城とそれを結ぶ自動車道を確保するのが精一杯、残りの広大な地域は八路军（現中国政府）が各部落に潜入して徹底抗戦を叫んでいた。わずか一年の宣撫工作だったが、今となっては懐かしい思い出がつぎつぎと浮かんでくる。

大部隊の戦闘に参加したり、小部隊で敵に遭遇、炎天下五時間に及ぶ戦い、スパイと目され銃殺寸前の者

を助けたり、戦時下ならではの数多くの異常な体験をした。

十四年職場に復帰、十八年開発生計組合石門支部に
出向した。管内には井徑など数か所の炭坑があり、多
数の中国人採炭夫が働いていた。主食の小麦を購入し
て製粉工場に送り、メリケン粉を各炭坑に配給するの
が目的で設立された組合だ。

二十年八月十日邯鄲（夢の枕の地）に出張した。人
民公社から小麦百トン、トン十五万円で売りたい。代
金はすぐ欲しいとの話、二つ返事でOKし、金は即刻
持参するから転売しないようにと約束した。石門では
トン三十万円が相場だった。米軍機の空爆を避けるた
め、列車は夜間運行のみ。十一日朝石門着。所長に経
緯を説明、他に買物もあるやもと、銀行から二十万
円を引き出すことにした。支店には手持ちが無く、北京
から取り寄せるとのこと。十四日金が届いたとの知ら
せに、五百円札一千万円をリュックサックに四個、百
円札一千万円を麻袋五袋に積めて、一行十人、車掌に
事情を話し一等車に乗り込んだ。夜中に車掌からここ

は順徳站だが命令で石門に引返すから下車して貰いた
いとのこと。友人の生計組合長に電話して社宅に泊め
て貰った。翌十五日早朝附近のタコ壺壕に分散待機し
た。所長から重大放送がある。行かないかと誘われた
が行けなかった。

所長は雑音がひどく聞き取れなかった。午後の放送
には責任者だけ機関区長室に集まれとの話、所長と共
に出席した。十二人ぐらい集まった。参謀肩章をつけ
た将校も二人いた。はつきりと終戦の御詔勅を聞いた。
私は感傷に浸るところで無い。待機している日本人七
人を密かに呼び、いちおう石門に帰る。同行の中国人
二人には秘密にして置けと指示した。折よく石門行き
の貨車が夕刻出発するとのこと。車掌車に乗り込ん
だ。中国人職員から、「班長さん邯鄲に行かないのか」
との問いに「石門に引き返す」とのみ答えた。十六日
朝石門着、二千万円は無事支部の金庫に納まった。

街の様相は一変した。日本人はヒッソリと家に閉じ
こもり、中国人は肩で風を切っかけて歩している。日
本人のどれもが体験した形容できないおびえと恐怖心

は、直面した者でなければとうてい理解出来まい。失業した日本人に追打ちをかけての超インフレ、卵一個十銭だったのが千円に、豚肉百匁一円二十銭が一萬二千円に暴騰した。日本人は帰国までの食いつなぎに必死。暴動、略奪が起きなかつたのが、せめてもの幸せだった。立場の逆転した今は、いつ中国人に呼び出されるかの不安は一瞬たりと脳裏から離れない。現に連れ去られた人達は、われわれが石門を去る日まで、遂に姿を現わさなかつた。

二十一年二月、引揚げのため、住民一千五百人無蓋車に乗り出発した。途中種々トラブルもあったが、長辛店、天津の収容所生活を経て塘沽から米艦LSTに乗り、二十一年五月二十七日佐世保に入港、石門出発以来四か月振りに緑したたる懐かしい祖国に第一歩をしろした。

北京より帰る

愛知県 長谷部 福美

支那事変も日を経るに従い、日本軍が中国の奥地に進出、その後方を守り固めるかたちで日本から移民を続々と送り込んだ。北京・天津等の主要都市には昭和十四年頃には、数万人の居留民がそれぞれの業務を行い、その子弟の教育機関も整備されてきた。

昭和十四年五月、愛知県より北京日本大使館に向を命ぜられ、六月七日、北京駅に降り、目前に正陽門を見る。日本大使館に出頭、北京日本青年学校に配属される。

学校は西城にあり、旧兵舎を改造したものであった。その後四年半、昼は普通科、夜は本科と日本内地と同じ教育であった。

昭和十九年一月、中華航空株式会社（日本の国策会社）が私立の青年学校を建てる要員として採用され、